

バッハのマタイ受難曲における「心」(Herz)

その他のタイトル	Das "Herz" in Bachs Matthaus-Passion
著者	芝田 豊彦
雑誌名	独逸文學
巻	54
ページ	193-201
発行年	2010-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/6512

バッハのマタイ受難曲における「心」(Herz)

芝田豊彦

周知の通りライプニッツを受け継いだヴォルフ (C. Wolff, 1679-1754) によってドイツ啓蒙主義の哲学は大成され、18世紀のドイツ思想の主流となった。ヴォルフにおいては、魂の根本能力のうち「知性」および「意志」の能力だけが注目されたが、意志の能力も認識能力との関連においてしか見られておらず、結局のところ啓蒙主義は知性中心主義という性格を帯びるのであった。それに対して18世紀の後半には、魂の第三の能力である「感情」が注目されるようになる¹。例えば『ファウスト』第一部において、ゲーテはファウストをして「感情がすべてである」²と言わせているし、19世紀初頭のシュライエルマッハーは神信仰を「絶対依存感情」として捉えている。このような感情重視は、啓蒙主義の知性偏重に対する反動とすることもできるが、単に反動と言うだけでは事の真相を捉えることはできないであろう。

18世紀後半において感情を表す言葉は、「感覚」(Empfindung)と「感情」(Gefühl)の間を揺れていた³。シュワーベン敬虔主義のエーティンガー (F. C. Oetinger, 1702-1782) は「センスス・コムニス」(共通感覚)を唱え、これを「感覚」とも「普遍的な感情」とも説明している。ここで注意しなければならないのは、「感覚」とか「感情」というような表現で、単に魂の第三の能力に限定されているのではなくて、ライプニッツやヴォルフにおける理性よりも深く認識できる能力、分析的知に対する全体的知といったものが含意されている点である。エーティンガーにあって

1 Vgl. Guntram Spindler: Einführung. In: Etwas Ganzes vom Evangelium, Friedrichs Christoph Oetingers Heilige Philosophie, Metzigen 1982, S. XXV.

2 J. W. v. Goethe: Werke Bd.3, Hamburger Ausgabe, München 2000, S.110.

3 Spindler S. XXV.

は、センスス・コムニスはさらに「心」(Herz)とも言い換えられる⁴。「感情」とか「心」という言葉を使わざるを得ないような、ライプニッツやヴォルフの哲学からは必然的に死角となるような境域が問題となっているのである。

同じような問題意識が、バッハ (J. S. Bach, 1685-1750) のマタイ受難曲の台本⁵においてすでに四半世紀も前に先取されていたように思われる。バッハのマタイ受難曲は、1727年ないし1725年に聖トーマス教会で初演されたのである。以下でマタイ受難曲の台本における「心」(Herz)を順に見ていくが、マタイ受難曲の歌詞作者である詩人ピカンダー (Picander) の果たした役割について一言だけ言及しておきたい。それは、受難曲を構成するマタイ福音書 (叙唱)・コラール・自由詩のうち、彼が書き下ろしたのは自由詩だけであったということである⁶。しかも磯山雅によれば、バッハはマタイ受難曲の台本全体の構成を司ったばかりでなく、自由詩の部分に対しても少なからぬ影響を及ぼしたことが推測されるのである⁷。

さてマタイ受難曲で最初に「心」が用いられるのは、第3曲 (コラール) の「心からお慕いする」(herzliebste) ①というイエスにかかる形容詞である。しかしこれは言語的にはさほど重要ではないように思われる。この形容詞の主要な意味は後半 (liebste) にあり、「心」はそれに付け加えられているにすぎないからである。次に用いられるのは第10曲 (アリア) で、「罪なる心」(Sündenherz) ②と表現される。これは信ずる者のところであり、「悔悛と悔悟が〔私の〕罪なる心を引き裂く」と歌われている。「私」(信者) のところが「罪なる心」と表現されるところでは、「私」はみずからの罪を認識し、悔い改め、イエスの心に感応する段階

4 Etwas Ganzes vom Evangelium, S.49.

5 テキストは次を用いた。J. S. Bach, Matthäus-Passion [...], Stuttgart (Reclam). 曲番号もこれによる。但し、②は他のテキストによった。

6 磯山雅『マタイ受難曲』東京書籍 1998年 83頁。自由詩には、アリア (叙情的な独唱歌曲)、伴奏付き叙唱 (begl. Rezitativ)、導入合唱や最終合唱の歌詞が含まれる。

7 磯山97頁。

に達している。かくして第12曲のアリアが歌われる。「血を流されるがよい、おんみ、愛する心 (du liebes Herz) ③よ！ ああ、おんみが育てられた子、おんみの胸で乳を吸った子〔ユダ〕が、この養育された方をまさに殺そうとしている。」ほとんどマリアを連想させる歌詞であるが、ここでの「おんみ」はやはりイエスのことであり、イエスが端的に「愛する心」と呼ばれている。このあたりの事情については磯山雅が詳しく解説している通りである。聖書主義を標榜するルター派はマリア崇拝を認めるわけにはいかず、従来マリアが担っていた母性的側面が、「授乳するイエス」というような「やや異様な表象」として民衆向けの説教伝統に入りこんだのである⁸。しかしマタイ受難曲を聴く者にとっては、第3曲の「心からお慕いする」という表現も、遠くから第12曲の「心」に向かって響いているように感じられる。そういう意味では、言語的にさほど重要ではない「心からお慕いする」という表現も、無視できない役割を担っているのかもしれない。

「イエスの母なる側面」を描く例として、磯山はヨーハン・アルント (Johann Arndt) から引用している。そこではアルントは「〔ヘルベルガーと〕同時代のルター派神学者」⁹としてしか紹介されていない。しかしアルントは、比較的新しい敬虔主義研究では非常に重要視され、「ルター派敬虔主義の父はシュペーナーではなく、アルントである」という声さえ聞こえるほどである¹⁰。アルントは学生時代から神秘主義の影響を受け、1597年には『ドイツ神学』の新版を出している。これを含む一連のテキストの出版を通して、彼は初期ルターによって高く評価された中世後期のドイツ神秘主義を再びルター派教会に取り戻そうとしたのであつ

8 磯山187頁。

9 磯山186頁。

10 Vgl. Johannes Wallmann: *Der Pietismus*, Göttingen 1991, S.15. ルター派における宗教的革新運動としての敬虔主義は、通例、シュペーナーによるコレギウム・ピエタシスの創建と『敬虔なる願望』の公刊に始まるとされる (Wallmann S.37)。このことは、教会的・社会的視点からも見られなければならないので、やはり正しいと言わざるを得ない。しかしながら、宗教的敬虔という点では、シュペーナーはアルントを継承しているのである。

た¹¹。磯山によるアルントの引用では、たしかに「イエスの母なる側面」は出ているが、「授乳するイエス」というイメージは明確ではないので、ここでは1700年に出版されたゴットフリート・アルノルトの著作から紹介しておきたい。アルノルトは神秘主義的敬虔主義ないしラディカルな敬虔主義を代表する人物である。問題の箇所は、雅歌1章4節「我々は葡萄酒にまさっておんみの胸をほめたたえる」に対する詩的解説である。アルノルトは「胸」をイエスの胸と解し、「おんみの人としての胸から私はいつも^{いのち}生命を吸う、その胸には〔愛弟子の〕ヨハネがもたれていた¹²」と歌う。ここで「人」とは、キリスト論を背景に、人としてのキリストということであり、イエスの胸にもたれる愛弟子ヨハネとは、最後の晩餐を描くヨハネ福音書13章23節に基づいている¹³。

受難曲に戻ろう。第18曲（伴奏付き叙唱）では、「イエスが私に別れを告げるので私の心（mein Herz）④は涙の中を漂う」とある。続く第19曲のアリアでは、「私はおんみに私の心（mein Herze）⑤をお捧げしたい、私の救いよ、内へとおくだりください！ 私もおんみの内に沈みたく思います」と歌われる。キリストとの一致が、キリストと「私」（信者）の相互内在とでもいうべき形式で表現されており、神秘主義的な色彩の強い詩句である。

第21曲（コラル）で、マタイ受難曲を象徴するパウル・ゲルハルト（Paul Gerhardt, 1607-76）の詩「おお血と傷にまみれたみ頭よ」の一節が最初に登場する。この詩はゲルハルトがラテン語から訳したもので、原詩は俗に聖ベルナルドゥスの作詞と言われているが、正確にはレーヴェン（Arnulf von Löwen）の作詞である。しかし彼も聖ベルナルドゥスの伝統の上に立っている。この詩は十字架像を見る時に用いられた。あるいはこの詩を読みながら、十字架のイエスを観想するのである。それ

11 Wallmann S.16.

12 Gottfried Arnold: Lob- und Liebes-Sprüche von der Ewigen Weißheit, S.6. In: G. Arnold, Das Geheimnis der göttlichen Sophia, Neudruck der Ausgabe von 1700, Cannstatt 1963.

13 ヨハネ福音書13章23節では、「弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた」（日本聖書協会）とある。キリスト教の伝承では、このイエスの愛弟子はヨハネ福音書を書いたヨハネ自身とされている。

ぞれの詩節で、イエスの肢体、すなわち足、手、脇腹、胸、頭に注意が向けられる。祈る人は、イエスの苦しみと与ることによって、イエスと一つになる。それは、官能的なものも排除しない心からの敬虔であり、情熱に満ちたイエスへの愛である。当時多くの詩人がこのラテン語の詩をドイツ語に移鑄しようとしたが、ゲルハルトの訳詩ほど生き生きしているものはなかった。彼のこの訳詩によって、典型的な受難歌の形式がルター派教会に与えられたのである。¹⁴

ルター派における「罪人の義認」と「神の恵みの言葉」は、本来、敬虔な興奮とは何の関係も持たない。それではどうしてゲルハルトの詩はルター派正統主義と衝突しなかったのか。レディング (G. Rödding) は次のように推測している。イエスと信者の距離を保つことによって、神秘的な激情が和らげられ、神の尊厳がいわゆる神秘的合一 (Unio mystica) を禁じたからである¹⁵、と。しかしはたしてこのように言ってしまうてよいのであろうか。ツェラー (W. Zeller) は、ゲルハルトを、マルティン・モラー、フィリップ・ニコライ、ヨハネス・シェフラーといったバロック神秘主義の系譜に加え、彼らによって神秘主義的な伝承の財産がドイツ教会歌に流入した、としている¹⁶。そもそも神と人の一致ということで、単純に両者の差異が廃されるところに、レディングの思惟の不徹底がある。キリスト教的に正しい意味のウニオ・ミユステイカとは、絶対に逆にできない順序を保持しつつ神と人がひとつであるという神人の弁証法的関係に基づくものでなければならない。したがって〈カトリック的神秘主義〉対〈ルター派正統主義〉というような固定的な枠思考では、このような現象を正しく捉えることはできないのである。

同じことはシュヴァイツァーのバッハ論にも当てはまる。彼は、18世紀初頭のカンタータと受難曲が敬虔主義に強く影響されているとして、

14 この段落は次を参照した。Gehard Rödding: Nachwort. In: Paul Gerhard, Geistliche Lieder, Stuttgart (Reclam) 1991, S.148f.

15 Rödding S.149.

16 Winfried Zeller: Einführung. In: H. Seuse u. J. Tauler, Mystische Schriften, München 1993, S.XVI.

バッハの信仰はルター派正統主義ではなくて神秘主義であると主張している¹⁷。彼の主張はたしかに傾聴すべきであるが、バッハが敬虔主義の影響を受けているとしても、そうであるが故にバッハの信仰がルター派正統主義ではないと断ずることはできない。〈カトリック〉対〈ルター派正統主義〉、また〈ルター派正統主義〉対〈敬虔主義〉といった表面的な対立を越えて、神秘主義の精神はプロテスタントにもその底流に脈打っているのである。したがってルター派正統主義にも、神秘主義の真正な痕跡を認めることができるのである。マタイ受難曲では、第26曲でキリストの「苦しみ」が「甘美」(süße)という言葉と結びつけられ、第66曲のアリアでは「甘美な十字架」(süßes Kreuz)という表現もあることを指摘しておきたい。

ペトロの否認をイエスが予言する聖書の箇所が続いて、第23曲のコラールではゲルハルトの上述の詩からの他の詩節が用いられる。「おんみの心(Herz)⑥が破れ、最後の死の一突きにおんみの心(Herz)⑦が色あせる時、私はおんみを私の腕そしてふところにお抱きしたい。」イエスにとって一番の弟子とも言うべきペテロの裏切りは十字架での一突きにも等しいという発想で、この詩節がコラールとしてここに挿入されたのであろう。「心」は第一義的には心臓を意味するので、「心が破れる」という表現は即物的で我々に圧倒的にせまるものがある。また心臓は血を連想させるので、「心が色あせる」という身体的表現も効果的である。

第24曲(叙唱)には、「私の魂(Seele)は悲しみのあまり死にそうである」(マタイ26章38節)というイエスの言葉がある。これが次の第25曲(伴奏付き叙唱)で、「苦しめられた心」(das gequälte Herz)⑧という表現に変えられる。眼に見えない「魂」という表現が、具体的な心臓をも意味する「心」という表現に取って代わられたという点で、注意すべき箇所である。

ユダヤ側の不実な証言に対して、イエスは沈黙をもって応じられる。これを受ける第41曲のアリアでは、信者である「私」もそのような嘲りに沈黙をもって耐えよう、と歌われる。なぜなら、「私の心(meines Herzens)⑨の無実に対して、愛する神が報復してくださるであろう」

17 辻莊一『J. S. バッハ』岩波書店 1982年 177頁参照。

から。しかし人間である限り、いつもこのようにいくわけではない。イエスの予言通りにペテロはイエスを否認し、「激しく泣いた」という聖書箇所を受けて、第47曲（アリア）では次のように歌われる。「私の神よ、私の涙の故にお憐みください。ご覧ください、心（Herz）⑩も眼もおんみの前で激しく泣いています。」ペテロの裏切りは「私」の裏切りでもあり、彼の涙は「私」の涙でもある。かくして「私」も神に憐みを乞うのである。

第53曲のコラールではゲルハルトの別の詩が用いられ、「おまえの道、またおまえの心（dein Herze）⑪を損なうものを、天を統べるお方の至誠の世話に委ねよ」と歌われる。そして第63曲のコラールで、再びゲルハルトの詩「おお血と傷にまみれたみ頭よ」のふたつの詩節が用いられる。直前の聖書箇所（第62曲）は、十字架にかかる前にイエスが嘲りを受ける場面である。第62曲の叙唱から第63曲のコラールへかけては、マタイ受難曲の頂点をなす箇所と言っても過言ではない。そのような箇所を導入する第61曲のアリアでは、第9、10、18、47曲で歌われた「涙」を前提に、その涙も何の甲斐もないならば、とアルトの女性がト短調の調べにのって切々と歌い出す。個人的には最も好きなアリアである。「私の頬の涙が何の甲斐もないならば、私の心（mein Herz）⑬をお取りください。傷が慈しみをもって血を流す時、それ〔私の心〕を、満ち溢れる血を受ける捧げの皿となさしめてください。」ここは心臓を意味する「心」（Herz）でないとだめであろう。漢字の「心」も心臓を形どった象形文字である。イエスのところと信者のところの切々たる感応交流は、心臓をも意味する「心」という表現であるが故に、一層切実に我々に迫ってくるのである。しかしながらイエスと信者の境界が曖昧にされることはない。イエスへの切々たる思いから、「私」（信者）は、みずからの心臓（Herz）を捧げの器として差し出そうとする。これは、第19曲のアリア「私はおんみに私の心（Herze）をお捧げしたい」とも通じている。第19曲がいつそう身体的に、切実に表現されたのが、第61曲であると言ってよいであろう。

ゲルハルトの詩「おお血と傷にまみれたみ頭よ」の詩節がコラールとして最後に用いられるのが、イエスが息をひきとった後に歌われる第72曲である。「私の心（das Herze）⑭が最も不安な状態にある時、おんみ

の不安と苦しみの力によって、もろもろの不安から私を引き離してください。」ルターは『キリスト者の自由』で、キリスト（花婿）の義と信者（花嫁）の罪の神秘的交換を説いているが¹⁸、ここでもキリストの苦しみの力が信者に融通される。イエスの苦しみの力によって救いだされた私の心が、今度はイエスに安らぎを与えたいと願うのが、第75曲の主旨となる。マタイ受難曲で「心」（Herz）が最後に使われるのは、この第75曲のアリアである。「私の心（mein Herz）¹⁵よ、おまえを清めよ、そして私はイエスを自ら葬ってさしあげたい。というのは、彼に今や私の内で永遠に甘美な安らぎを得ていただきたいからである。」後半の文意からすれば、前半は、私の内にイエスを葬る、ということになるであろう。ガラテヤ書2章19節の「もはや生きているのは私ではない、キリストが私の内に生きておられる」という聖句も思い出される。しかし第75曲では、「安らぎ」（Ruhe）という言葉が重い。凄惨な死をとげたイエスを私の内で休ませてあげたいという「私」（信者）の思いである。神秘的合一という側面もちろんあるが、そのような神学的思想の表明に終わらせないのも、信者のイエスに対するいたわりの思いであろう。なお、「安らぎ」を意味するドイツ語（Ruhe）は、ルターによる旧約的な「安息」のドイツ語訳¹⁹でもある。

この第75曲（アリア）はマタイ受難曲の最後の合唱を指し示しつつ、その先鞭をつとめる。マタイ受難曲全曲、すなわち第78曲の合唱は次の詩句で終わる。「我々は涙とともにひざまずき、墓の内でおんみに呼びかけまつる。休み給え 安らかに、安らかに 休み給え。」詩想としては、明らかに第75曲を引き継いでいる。「安らぎ」はたしかに復活も射程に入れているであろうが、むしろイエスをそっと休ませてあげたいという気持ちの方がまさっているように思われる。また第18曲の「私の心は涙の中を漂う」という詩句も連想される。第18曲の涙は、イエスが「私」に別れを告げるが故の涙であったが、ここでの涙は、イエスが死して後に溢れる涙である。しかも復活を先取して、喜びの涙のようにも思われる。しかし復活ということももはや言う必要がないのかもしれない。

18 Luther Deutsch Bd.2, Göttingen 1991, S.257f. (WA 7, S.25f.)

19 申命記3章20節、ヨシヤ記21章44節、その他。

身体の復活を前にすでにキリストは我が内におられる、ということなのであろうか。そのような教義的な理屈を不問にして、イエスを休ませてあげたいという気持ちが聴く者の心に伝わる。

以上述べてきたように、マタイ受難曲において「心」(Herz)は15箇所 で用いられている²⁰。「心」は不可視なところであると同時に可視的な心臓である。歌う「私」のところであると同時に聴く我々のところであり、またイエスのところである。このようなところがお互い感応しあい、響きあう——単なる知的な理解を越えたところに展開される文字通りの「心の神秘主義」(Herzensmystik)。そのようにマタイ受難曲の神秘主義を呼ぶことも可能なのではなかろうか。バッハの音楽によってこの神秘主義はさらに切実に我々の胸に響くのである。

20 それぞれ丸で囲んだ数字で示した。ただ1箇所だけまだ紹介されていないので、以下で紹介しておく。それは、官吏に対する批判の言葉として、第60曲(伴奏付き叙唱)で用いられている。「お前たちも心(ein Herz)⑫を持っている。しかしそれは拷問の柱のようである、いやそれよりずっと残酷に違いない。」

それに対して「魂」(Seele)の使用は10回である(聖書の1回を含む)。